

MLA 連携〔論〕を素地とする建学者アーカイブの構築の意義と展望

－『跡見花蹊日記』のフルテキスト・データベースの構築とユニーク語彙の出現に係る検証の試みを中心に

On the Meanings and Views towards the Construction of Digital Archives for Academic Institutions' Founders based on the Ideas of MLA Collaborations: through the Test Trials of Digital Archiving of *ATOMI Kakei's Diaries* and Verification of Appearance of Unique Vocabularies in *Kakei's Diaries*

水谷 長志

MIZUTANI Takeshi

要 旨/目 次

「跡見花蹊アーカイブにおける MLA 連携を内包するシステム構築のための予備的研究（i）—MLA 連携から見る花蹊日記における花蹊ユニーク語彙の出現にかかわる実事例検証の試み」を研究題目とする令和3年度大学特別研究助成を得て、『跡見花蹊日記』のフルテキスト・データベースを試行的に構築して、特に人名・事項・作品の3観点から検索することによって、花蹊ユニーク語彙の出現についてその傾向を検証し、今後の大学アーカイブの形成と大学組織内に潜在的に構築の可能性のある学内 MLA 連携について、その課題と展望を明示することを試みた。

あわせて「アーティストは一面優れてアーキビストである」ということの実証を跡見花蹊の創作の記録である「揮毫雑記」に見出し、より精密な作品創造に係る記録を日記に重ねて、MLA 連携の要となることを指摘する。

はじめに—本学における MLA 連携〔論〕の唱導の点綴

1. MLA 連携〔論〕についての理解の共通前提を築くために
2. MLA 連携〔論〕要諦—論点の整理として
 - 2.1 大学における建学者アーカイブの構築の試み—その概観
 - 2.1.1 大学アーカイブの構築の枠組みと花蹊アーカイブ
 - 2.1.2 大学における MLA 連携の2面性—「外なる/内なる」MLA 連携
 - 2.2 女子大学における建学者アーカイブの構築状況の把握
3. 本稿における「MLA 連携を内包するシステム構築のための予備的研究」に資する解析対象データの概況
 - 3.1 解析対象データの概況把握に係る前提
 - 3.2 把握された本学 MLA である花蹊記念資料館（M）および大学図書館（L）の MLA 連携候補の資料について
 - 3.2.1 花蹊記念資料館による既刊冊子体目録から
 - 3.2.2 大学図書館 OPAC から把握できる刊本以外の花蹊関与の著作資料について
 - 3.2.3 PDF 公開された『跡見花蹊日記』について

4. 跡見花蹊日記のデジタルアーカイブ化の基礎ステージとしてのフルテキスト・データベースの構築の試み

4.1 跡見花蹊日記フルテキスト・データベースの構築に係る基礎データのDB搭載前処理について

4.2 跡見花蹊日記フルテキスト・データベースの検索インターフェースとその検索結果の表示

4.3 跡見花蹊日記におけるユニーク語彙の出現に係る検証の試み

4.3.1 跡見花蹊日記におけるユニーク語彙とは

4.3.2 人名・事項・作品名から花蹊日記を検索すると

4.4 「揮毫雑記」という花蹊アーカイブと作品検索に係る現況から展望できること

5. 今後への展望と課題

謝辞

註および参考文献

はじめに一本学における MLA 連携〔論〕の唱導の点綴

Museum, Library, Archives の連携を MLA 連携と称して論考を書き重ねてきたのは、筆者の前職、国立美術館情報企画室ならびに東京国立近代美術館企画課情報資料室での体験、あるいは今日、日本製ヨーロッパアーナと言えるジャパンサーチ¹⁾の2020年夏の公開に至る前史において、「内閣府デジタルアーカイブの連携に関する関係省庁等連絡会、実務者協議会及びメタデータのオープン化等検討ワーキンググループ」²⁾に2015-17年に参画したこと、およびアート・ドキュメンテーション学会での議論と提案や様々な企画開催がその機縁となっている。

2018年、所属を本学に移してからは、下記の論考の発表等において、MLA 連携の本学における可能性とその意義を述べてきた。

発表1) 2019.6.19: 「大学ブランディング力と学部学生の調査研究力の向上は両立するだろうか?!
ー花蹊コンテンツの「見える」化の可能性をめぐって」/文学部FDワークショップ「跡見ブランディングに向けた教育のあり方」におけるプレゼンテーション

論考1) 2020.3.15: 「MLA 連携〔論〕は学部学生の新たな調査研究メソッドになるだろうか?ーミュージアムの中のライブラリ&アーカイブで構想した〈MLA 連携〉から大学の教育現場で提案する新たなリサーチ・メソッドとしての〈SLA 連携〉へ」/『[跡見学園女子大学] 人文学フォーラム』18号, p.76-91.

発表2) 2021.6.28: 「跡見花蹊アーカイブの形成とその意義」/本学中期計画広報委員会におけるプレゼンテーション

上記の発表はいずれも MLA 連携の本学における展開の方向と意義を示すこと、および MLA 連携が斯界の共通課題として、関係者に共有されてきた歴史的背景を述べることを主眼としており、その実装システムの構築に着手することを報告するものには至ってはいなかった。

本稿は、「跡見花蹊アーカイブにおける MLA 連携を内包するシステム構築のための予備的研究 (i) —MLA 連携から見る花蹊日記における花蹊ユニーク語彙の出現にかかわる実事例検証の試み」を研究題目とする令和 3 年度大学特別研究助成費の交付を受けての成果を、特に『跡見花蹊日記』のフルテキスト・データベースの構築を試行して、実装的 MLA 連携機能の開発の基礎的成果の一端を報告することを目的としている。

以上を筆者による本学における MLA 連携〔論〕の唱導の点綴として記し、「はじめに」に代えるものとした。

1. MLA 連携〔論〕についての理解の共通前提を築くために

上記の論考 1) においては、MLA 連携についての簡約な説明として『図書館情報学事典』第 4 版 (無署名, 丸善, 2013) に記載の事項解説を引いていたが、MLA 連携を定義的に解説するものとしてあらためて筆者自身による以下の論述をもって、MLA 連携〔論〕についての理解の共通前提を築いておきたい³⁾。

ミュージアム (M)、ライブラリ (L)、アーカイブ (A) が、いずれも人類の歴史的・文化的・知的遺産を収集・公開し、次世代へ継承する類縁機関として営々と機能してきたが、近年、インターネットとデジタルアーカイブの隆盛を背景に、その豊かなデジタル情報資源へ、総合的包括的にアクセス可能にすることを志向する機運全体を指すのが MLA 連携である。

§ 1. MLA の字順およびその近似語

この10年余、MLA はその字順について 3 者の親和性の強弱から LAM に、Gallery を加えて GLAM に、公民館 (K) を加えて MLAK (saveMLAK に代表される) に、大学 (U) と企業 (I) を加えて MALUI に、さらに劇場 (T) が加わる MULTI などのさまざまな連携、あるいは 1 組織内での連携を融合と言い換えるなど、さまざまな拡張や変奏が繰り返されてきた。今日、あえて MLA 連携と言わずとも、これら蓄積型の文化機関における従事者の間では、広く基底的であり自明の命題として共有されている。

§ 2. MLA 連携の発端

MLA が並び立ち連携する、いわゆる MLA 連携の語としての発端は、多分に偶発的なものであった。この 3 者を並べてその「繋がり」の意義を問うた初発は、1994 年、アート・ドキュメンテーション学会が創立 5 周年を機に「美術情報と図書館」を全体テーマに研究フォーラムが国立国会図書館にて開かれ、メインシンポジウムの題目を「ミュージアム・ライブラリ・アーカイブをつなぐもの—アート・ドキュメンテーションからの模索と展望」としていたが、この語順に明

確な意図はなかった。1994年の当時においては、この3者の並列とその連携の提案は、唐突の感
は逃れえず、かつ議論の深化が及んだとは言えないものの、MLA界に小さな一石は投げられた。
その後、15年を闊しての2009年、同学会の20周年を機に開催した「MLA連携の現状・課題・将
来」は当時の国立博物館、国立国会図書館、国立公文書館の館長を招いての鼎談もあり、翌年刊
行された報告書がMLA連携の認知に益し、2010年を境に、類書が図書館情報学のみならず多方
面から刊行が続いた^{4,5)}。

筆者は以前、MLA連携についての研究文献レビューにおいて、その淵源を1988年の *Library Trends* の特集「美術品と美術情報をつなぐ」(“Linking art objects and art information”)に見出し、「管見の限り、もっとも早くMLA連携を明確に示した文献は、コロンビア大学エイヴリー美術建築図書館のヒラル(Angela Giral)による「3つの伝統が合流するところ：エイヴリー図書館の建築ドローイング」(“At the confluence of three traditions: architectural drawings at the Avery Library”)であった」と書いた⁶⁾。この3つの伝統こそMLAであるが、この特集においても寄稿しているボストン美術館図書館のアレン(Nancy S. Allen)は先に、Research Libraries Group (RLG)の指揮下において、Art and Architecture Program Committee (AAPC)が組織されてることを報告しているように⁷⁾、RLGとMLA連携は極めて近い関係にあったと指摘できるだろう。

§3. MLA連携の二つの形

慶應義塾大学のDAFの招きで来日を重ねていた、当時はRLGの副代表であったミハルコ(James Michalko)は、MLAの連携(collaboration)のあり方を「一つ屋根の下のMLA」(MLA under same roof: An individual institution with all three types of organizations)と「荒野に立つ3つのMLA」(MLA in the wild: Individual independent institutions)と説明しているが、この論はMLA連携に現れる2つのトライアングル、すなわち「館の「内」と「外」」においてMLAの繋がる2つの連携のタイプがあるという、筆者が1996年に示した構図とびたりと重なるものであった⁸⁾。

2009年の国立MLA3館長の鼎談の図はまさに「館」と「館」の連携であるわけであるが、10年を経てMLA連携の議論の昂まりもおさまる中、2019年に『大学図書館研究』が5本の論文をそろえて「小特集：MLA連携」を組んでいる⁹⁾。ミハルコの招聘につとめた慶應大学の例はあるものの、大学からのMLA連携に係る発信は、博物館・美術館あるいは美術図書館からのそれに比すれば少なかった。注目すべきは、大学という一つの傘(ミハルコ流に言えば一つの屋根(roof))の下に、大学の中であってMLAが相互に連携するありようは、大学の中での「内」なるトライアングルであるとともに、個々のMLAにおいては「館」と「館」との間につながれた「外」なる連携と言える。このようなMLA連携にある二重性、あるいは多層性こそは、今後の蓄積型の

文化資源機関の大きな有意性と可能性を体現するものである。

§ 4. 総合の回復としての MLA 連携

翻って見れば近代博物館の嚆矢としての大英博物館は、サー・ハンス・スローンの個人コレクションの競売を阻止しての買い上げから始まり、その一世紀後に6代目館長となる主任司書アントニオ・パニッツィが大英博物館の中にライブラリーを円形閲覧室として開いたこと、日本の少なくとも国立の博物館と図書館が明治5年の湯島聖堂大成殿での文部省博覧会から始まり、一噌斎国輝が図中真真中に金の鯨をでんと置いて示した《古今珍物集覧》が示す通り、近代 MLA の濫觴は未分化のままにあった。近代化は紛れもなく効率を旨とする専門化という分化のプロセスであるが、元を辿れば一体であったというところの、いわば総合が喪失されていく過程であった¹⁰⁾。MLA 連携は総合の喪失の回復を基底に抱え込んでいる、ある志向でありフィロソフィーであると言ってもよいであろう¹¹⁾。

同じく上記の論考1)には、「1.3 MLA 連携の関連文献史を展望する」の節を著しているの、併せて参照して頂ければ幸いである。

2. MLA 連携〔論〕要諦—論点の整理として

2.1 大学における建学者アーカイブの構築の試み—その概観

2.1.1 大学アーカイブの構築の枠組みと花蹊アーカイブ

「大学における建学者アーカイブの構築の試み」を述べるにあたっては、大学アーカイブの議論の高まりとその成果をまず確認する必要がある。以下の多くは、加藤論著『大学アーカイブズの成立と展開—公文書管理と国立大学』（以下、「加藤2019」）¹²⁾ならびに菅真城著『大学アーカイブズの世界』（菅2013）¹³⁾に拠っている。加藤2019によれば、全国大学史資料協議会は全国研究会の統一テーマとして、2001年に「大学アーカイブズの設立と運営」を、2004年に「大学アーカイブズのこれから」を開催しており（以下、「アーカイブ」の表記は、拙稿本文においてはアーカイブを、引用・参考文献においてはそれに従う）、大学アーカイブ論の高まりは21世紀に入りいよいよ顕著となって、2005年の同協議会編になる「日本における大学アーカイブズを取り上げた最初のもの」として、『日本の大学アーカイブズ』¹⁴⁾が刊行される。加藤2019は2017-19年の、菅2013は2006-11年の初出論考を起源としており、2005年の『日本の大学アーカイブズ』を継いでまとめられた個人単著として位置づけられる。

菅2013は大学アーカイブの議論において、その前身であろう大学史アーカイブとの連続と懸隔、ならびに飛躍を第2章「大学アーカイブズの社会的使命」の第2節「ソレは「チガウ！」—「大学史」と「大学アーカイブズ」」において述べている。さらに同章第4節「「トータルアーカイブズ」として

の大学アーカイブズ「機関アーカイブズ」と「収集アーカイブズ」においては、大学アーカイブを含んでアーカイブ論全般において顕れる2種、つまり「機関 (institutional)」と「収集 (collecting)」の2つのアーカイブに峻別する根拠として、アメリカ・アーキビスト協会の用語集を引用する：

「機関 (institutional)」は「親機関によって作成ないし受理された記録を保管する場」であり、「収集 (collecting)」は「親機関ではなく (大学の外の [筆者補記]) 個人、家族、組織から資料を収集して保管する場」と訳出している¹⁵⁾。言うまでもなく、archives には「保管の「場」の意味と「記録・史資料「そのもの」」の二面の意味が存する。また、収集アーカイブにおいては、「親機関ではなく大学の外の」と傍点部を補記するならば、アーカイブ論に不案内な読者においても、より両者の区別が明瞭になるだろう。

さて、本学においては2025年、創立150周年を迎えるという建学の歴史の中で、すでに大学史と言える労作ならびに学祖跡見花蹊の伝記もまた2018年刊の泉雅博・植田恭代・大塚博の3著者による『跡見花蹊 女子教育の先駆者』¹⁶⁾に至るまでその数は多い。本稿の花蹊の理解においても、2018年の本書を多く参考にさせていただいている。

このような花蹊と本学に関する刊本に加えて、2005年に翻刻・書籍化された『跡見花蹊日記』全5巻（別巻のみ2007年刊、表4参照）の基となる花蹊自筆の日記、花蹊による筆・画・書の書画作品の類、書簡、写真等々、本学が有する花蹊および大学史アーカイブの資料はまことに豊穡である。

その花蹊アーカイブを菅2013のアーカイブ分類の体系に即して、図示して定置するならば、図1に

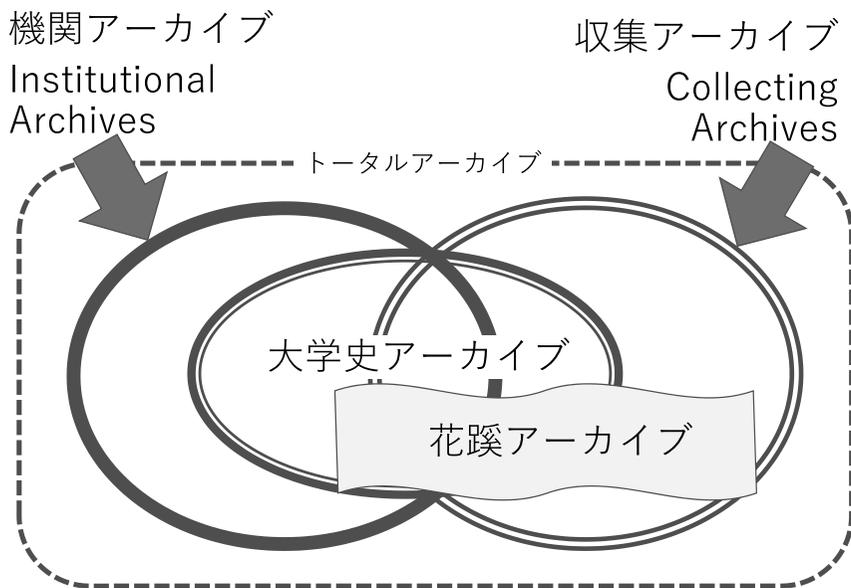


図1：大学アーカイブの相関

破線：トータルアーカイブ/実線：機関アーカイブ/二重線：収集アーカイブ/二重二重線：大学史アーカイブと花蹊アーカイブ

なると考えられる。

本稿におけるアーカイブの射程の範囲は、この図における「花蹊アーカイブ」であるが、さらに「収集」から「大学史」のアーカイブを含んで、「機関」へ拡張して、当然、菅2013の言う「トータルアーカイブ」を志向することが期待される。それはまた、大学を越えて、学園（法人）アーカイブにまで拡張されるものとなるだろう。

2.1.2 大学における MLA 連携の 2 面性—「外なる/内なる」 MLA 連携

上記「はじめに」において論考 1) として挙げた『人文学フォーラム』18号の拙稿では、「1.2 MLA 連携の萌芽とその展開」において、MLA の連携の形として、James Michalko 氏による図を引用借用した。本図は MLA 連携の 2 面性の理解を促すものとしては格好のイラストと説明であり、本稿においても図 2 として再掲したい。

MLA under same roof とは、同じ組織内であって、M・L・A が一つ屋根の下に存在するという、あたかも東京国立近代美術館（M）の中であって、L と A が共立している様子を示している。

MLA in the wild とは、個々個別独立の組織、例えば東京国立博物館と国立国会図書館と国立公文書館との間で、コレクションについてそのメタデータを統合して仮想的に同一で大規模なデジタルアーカイブを創出する、謂わばジャパンサーチの小規模実現形のモデルを表すものである。

本学においては、花蹊記念資料館という M と大学図書館（L）、および花蹊記念資料館の中にもあ

MLA under same roof:

An individual institution with all three types of organizations



MLA in the wild:

Individual independent institutions



図 2：2 つの MLA 連携

J. ミハルコの「一つ屋根の下の MLA」(MLA under same roof: An individual institution with all three types of organizations) と「荒野に立つ 3 つの MLA」(MLA in the wild: Individual independent institutions)

和暦	西暦	2025年時高 創立から の年数	建学者	建学の学校名など	現在の名称	建学者および歴史に関わるWebサイトの名称 ア) 本題頭を持つものは下記のアドレスからの採録したもの ブ) フェリス女子学院のホームページ ア) 女子コレクショ	下記のURLはいずれも2021.10.24に参照
明治 3	1870	155	メアリー・E・キター	ヘボン塾(蘭学キター塾、英語の授業開始)	フェリス学院大学		https://www.feris.jp/history/index.html https://www.library.feris.ac.jp/
明治 4	1871		津田梅子ら女子留学生、岩倉具視(米朝親善団)同行				
明治 7	1874	151	ドーラ・E・スクラメンター	女子小学校	青山学院大学	青山学院資料センター Aoyama Gakuin Archives Letter 青山学院資料センターだより	https://www.zoyamagakuin.jp/history/mccenter/index.html https://www.aoyamagakuin.jp/history/mccenter/ogaki.html
明治 8	1875	150	跡見花菱	跡見学校	跡見学園女子大学	理念・建学の精神 跡見学園のあま 守祖・跡見花菱 花菱記念資料館 ア) 同慶館所蔵百人一首コレクション	https://www.atomi.ac.jp/univ/about/philosophy/ https://www.atomi.ac.jp/progress/atomi/ake/ https://www.atomi.ac.jp/univ/museum/about/ https://tcc.adacc.tcc.co.jp/W111C00/W111052U/1171055100
明治 10	1877	148	新島襄	同志社女子校	同志社女子大学	新島襄遺稿 今出川キヤンパス	https://www.doshisha.ac.jp/information/history/faculty.html
明治 11	1878	147	チャニング・M・ウィリアムズ	立教女子校	立教女子学院	創立者について	https://www.rikyogakuen.ac.jp/about/founder/
明治 12	1879		津山宗耀	梅花女子校	梅花女子大学	沿革	https://www.baika.ac.jp/aboutus/history/
明治 12	1879		教育令公布				
明治 14	1881	144	津邊部五郎	和洋義塾(伝習所)	東京家政大学	学園の歴史と創設者コーナー	https://www.tkyo-keiai.ac.jp/academics/museum/history.html
明治 17	1884	141	マーサ・J・J・カートメル	英洋英和女子学校	英洋英和女子学院大学	沿革・村岡花子と英米英和	https://www.tkyo-keiai.ac.jp/academics/museum/index.html
明治 18	1885	140	宮内春	華英女子校	学習院女子大学	学習院女子大学の歴史 ア) 山崎コレクション	https://www.gac.gakushuin.ac.jp/about/ https://www.gac.gakushuin.ac.jp/library/collection.html
明治 19	1886	139	伊方義	空城女子校	空城学院女子大学	沿革	https://www.mgi.ac.jp/main/about/history/index.html
明治 23	1890	135	福山番子ら34名 文部省	共立女了職業学校 女子高等創成学校	共立女子大学	ア) 博物館コレクション 沿革	https://www.kyritisu-wu.ac.jp/muse/collection/
明治 28	1895	130	高等女学校創成制定				
明治 30	1897	128	尾崎千代	和洋義塾女子学院	和洋女子大学	沿革(和洋のあま) ア) 山崎コレクション 大卒の沿革	https://www.wyop.ac.jp/guide/history/tabid/15/Default.aspx https://www.wyop.ac.jp/facilities_compose/museum/bando/collections/about/5660/Default.aspx https://www.aburui.ac.jp/daijiz/history/index.html
明治 31	1898	127	シャトルワースバロ修道女会 高等女子伝道学校	白百合女子大学	白百合女子大学		
明治 32	1899	126	下田歌子	英法女学校、女子工藝学校	英法女子大学	下田歌子記念女性総合研究所 刊行期：下田歌子記念女性総合研究所研究業績第1巻(2021年8月25日発行) [下田歌子と近代日本—音楽家・作曲家と女子教育の軌跡—] 上井孝輔(編著)	https://www.jfssn.ac.jp/s/timobd/index.html
明治 33	1900	125	吉岡弥生	東京女医学学校	東京女子医科大学	大学校沿革・吉岡彌生記念室	https://www.tamu.ac.jp/univ/about/youu.php
明治 34	1901	124	津田梅子	女子英学塾	津田塾大学	津田塾の歴史 津田塾大学アーカイブ ア) 津田塾 大学概要	https://www.tsuda.ac.jp/aboutus/history/index.html https://lib.tsuda.ac.jp/DigitalArchive/
明治 36	1903	122	西澤之助	日本女学校	明桜女子大学		https://www.sagami-wu.ac.jp/univ/sky/outline/
明治 38	1905	120	成瀬仁蔵	日本女子大学校	日本女子大学	卒業で語る日本女子大学の110年	https://www.you.ac.jp/univ/about/history/photographs.html
明治 38	1905	120	津田梅子合公布				
明治 38	1905	120	福山正生、小島共喜	名古屋義塾女子校	福山女子学院大学	ア) アジタムライブラリー	https://zeami.cs.sugiyama-u.ac.jp/4/

り、図書館の中にもある自筆手稿である花蹊日記をはじめとするアーカイブ (A) との間において、個々個別独立に存在しつつ連携を構築するならば、その MLA 連携は、MLA in the wild という図になるだろう。

同時に親組織としての大学 (または学園 (法人)) の下にある MLA と考えるならば、それは、MLA under same roof の MLA 連携と言えるだろう。つまり、Michalko 氏の 2 つの連携モデルは、「外なる/内なる」MLA 連携と同一であり、大学における MLA 連携に普遍的に見出すことのできる秀逸なモデル図と言えるだろう。

2.2 女子大学における建学者アーカイブの構築状況の把握

2000年代に入って大学図書館の再構築、特に国立大学に顕著な動静は、菅2013に倣えば、「大学史編纂と資料保存」⇒「情報公開法―「機関アーカイブズ」への指向」⇒「公文書管理法―「機関アーカイブズ」としての大学アーカイブズ」をジャンピング・ボードとして展開してきた¹⁷⁾。21世紀に入ってからのおよそ20年間は、一方で MLA いずれにおいても顕著なデジタルアーカイブの構築と公開とほぼ軌を一にする。

次章以下に展開する、本稿の主要題目である『跡見花蹊日記』のデジタルアーカイブの位置を他大学の事例と比較する試みの一助として、特に女子大における建学者ならびに大学の歴史的沿革に係るデジタル情報の発信について、その概況を表1にまとめている。

本表は本学花蹊記念資料館において掲示される「明治時代～大正時代 主な女子大学創立の歩み」とアンドラによって Web に公開されている「私立大学のデジタルアーカイブ」(2017年11月以降随時追加更新)¹⁸⁾をもとに作成している。

本表に収録の女子大学においては、組織化されたデータベースを背景に持つ検索型で、かつ建学者に焦点を当てたデジタルアーカイブは、津田塾大学の津田梅子アーカイブが特筆的である。お茶の水女子大学の図書館によるデジタルアーカイブも充実しており、情報源としての資料性も高い。ほかの多くは大学の沿革と歴史をプレーンな html ページとして公開しているものが過半である。本学に関わり、アンドラが挙げたのは TRC-ADEAC 上の「百人一首」アーカイブである¹⁹⁾。これはジャパンサーチともすでにデータ連携を果たして、高い評価も定着しており、私立女子大学のデジタルアーカイブの事例の中にあって極めて顕著な成功事例となっている。

3. 本稿における「MLA 連携を内包するシステム構築のための予備的研究」に資する解析対象データの概況

3.1 解析対象データの概況把握に係る前提

前述の通り、本稿は令和3年度大学特別研究助成費を基礎に実行した「跡見花蹊アーカイブにおける MLA 連携を内包するシステム構築のための予備的研究」であり、特に「MLA 連携から見る花蹊

花蹊記念資料館刊行目録	編・刊	備考：収載作品数に関する	収載総点数
跡見学園女子大学花蹊記念資料館収蔵資料総合目録_3_2020(令和2年度)	花蹊記念資料館編・2021刊	113-169; 巻末「作品リスト」における連番	743
跡見学園女子大学花蹊記念資料館収蔵資料総合目録_2_2019(令和元年度)	花蹊記念資料館編・2020刊	052-112; 巻末「作品リスト」における連番	169
跡見学園女子大学花蹊記念資料館収蔵資料総合目録_1_2018(平成30年度)	花蹊記念資料館編・2019刊	001-051; 巻末「作品リスト」における連番	
収蔵品目録3：跡見純弘コレクション	花蹊記念資料館編・2018刊	001-049; 巻末「作品リスト」における連番	49
花蹊の書簡(収蔵品目録新シリーズ; IV(2017))	花蹊記念資料館編・2018刊	収蔵品目録新シリーズ; IIIの書簡(5-11)を引き継ぎ書簡12-21を掲載	27
花蹊の書簡(収蔵品目録新シリーズ; III(2015))	花蹊記念資料館編・2016刊	収蔵品目録新シリーズ; IIの書簡(1-4)を引き継ぎ書簡5-11を掲載	
跡見花蹊の名品(収蔵品目録新シリーズ; II(2014))	花蹊記念資料館編・2015刊	編 花蹊の画(3)/II編 花蹊の書(3)/III編 花蹊の書簡(4)	46
写真でみる跡見家の軌跡(収蔵品目録新シリーズ; I)	花蹊記念資料館編・2014刊	本編(写真21)/資料編(写真18)/ 資料編III(史料7)からなる	
収蔵品目録2：跡見純弘コレクション	花蹊記念資料館編・2010刊	001-110; 巻末「作品リスト」における連番	110
収蔵品目録：跡見純弘コレクション	花蹊記念資料館編・2006刊	001-342; 巻末「作品リスト」における連番	342

表2：花蹊記念資料館による既刊冊子体目録における収録作品等点数

日記における花蹊ユニーク語彙の出現にかかわる「実事例検証」を試みることを主眼としている。当然のことながら、MLA 連携を内包するシステム構築の端緒を開くことは大きな目的の一つであるが、本学の MLA ともいべき花蹊記念資料館、大学図書館ほか関連部署における管理公開等の実務実態に即した業務モデルをここで提案するものでは、到底ない。

また、本稿を成す時点においては、MLA 連携を内包するシステム構築に係って、連携されるだろう実データについても、一部、花蹊資料記念館に所在する「揮毫雑記」に係るものを除けば、いずれも図書館 OPAC または冊子体刊行物、ならびに本学ホームページ上において公開の諸データにおいてのみを検証の対象としている。

以下、MLA にわたって筆者が把握できた検証対象となる諸データを表に現してその概況を示しておきたい。

3.2 把握された本学 MLA である花蹊記念資料館 (M) および大学図書館 (L) の MLA 連携候補の資料について

3.2.1 花蹊記念資料館による既刊冊子体目録から

筆者管見の範囲において把握できた花蹊記念資料館による既刊冊子体目録を表化して、そこから、現況において明示化できる同館所蔵資料の点数をカウントした (表 2)。

3.2.2 大学図書館 OPAC から把握できる刊本以外の花蹊関与の著作資料について

本学大学図書館 OPAC から筆者管見の範囲において把握できた同館所蔵の刊本以外の、花蹊の著作の関与が、筆・画・書と記された同館所蔵資料の点数をカウントした (表 3)。

花蹊著作関与の種別	136
画	53
画賛	3
作	2
写	2
書	50
著	7
筆	19

ショウリン サンサイズ							
松林山水図 / 跡見花蹊[画]							
データ種別	図書						
出版者	[書写地不明]: 跡見花蹊[自筆]						
出版年	[書写年不明]						
本文言語	日本語						
大きさ	1軸; 205.0×39.8cm						
所蔵情報を非表示							
記架場所	巻次	請求記号	資料番号	状態	コメント	請求メモ	予約/取寄
[N]特別資料室(資料館)		721.9/A94	1113664070	禁帯出			

表 3：本学大学図書館 OPAC から把握可能な筆・画・書など花蹊関与の著作資料の所蔵点数 [類推]

3.2.3 PDF 公開された『跡見花蹊日記』について

『跡見花蹊日記』は表 4 の通り、第 1-4 巻および別巻が刊行されている。初刊第 1 巻所収の「序」

および第4巻所収の「後記」から、その事業着手についての経緯が下記の通り記されている。

「序」より

学祖跡見花蹊は、文久元年（1861）21歳から大正14年（1925）85歳まで、全47冊の日記を残している。昭和59年（1984）女子大学は、明治以来の女子教育の中で跡見学園が果してきた教育の全容を解明するために根本資料である学祖の日記の解説に着手した。

平成17年4月 跡見学園女子大学 学長 山崎一穎
(数字は漢数字をアラビア数字にあらためて表記, p.4)

「後記」より

本『跡見花蹊日記』の編纂事業は、山崎一穎学長の下、昭和59年に、大学の20周年記念事業として計画され、その作業を開始した。

平成17年11月9日 花蹊日記編集委員会 座長 岩田秀行
(数字は漢数字をアラビア数字にあらためて表記, p.811)

冊子体日記の収録範囲		冊子体日記の刊行年月	冊子体 総ページ数
第1巻: 自文久元年至明治19年	巻頭に「序」 学長 山崎一穎 による	平成17（2005）年12月20日	915
第2巻: 自明治20年至明治35年		平成17（2005）年12月20日	831
第3巻: 自明治36年至大正2年		平成17（2005）年12月20日	874
第4巻: 自大正3年至大正14年	巻末に「後記」 編集委員会座長 岩田秀行による	平成17（2005）年12月20日	815
別巻: 参考資料・補遺編	巻末に「あとがき」 編集委員会座長 岩田秀行による	平成19（2007）年3月31日	831

表4：既刊『跡見花蹊日記』概略

2005年、第4巻刊行の翌々年の2009年3月末日に刊行された別巻：参考資料・補遺編を除き、第1-4巻のほぼ全ての全文がPDF化されて、本学ホームページ公開されている²⁰⁾。そのファイルに係る諸要素を表5にまとめた。

次章において、花蹊22歳の文久元年（第1巻所収）の日記PDF：1-02-02Bunkyu01.pdfから花蹊84歳の1925年（第4巻所収）の日記PDF：4-12-56Taisho14.pdfまでの55ファイルを元に構築したフルテキスト・データベースについて詳述する。

跡見花蹊日記/目次/年代	文久元年 ～大正十四年 花蹊年齢	オリジナルPDFファイル名	冊子体巻次	跡見花蹊日記/目次/年代	文久元年 ～大正十四年 花蹊年齢	オリジナルPDFファイル名	冊子体巻次
序		0-1 jyo.pdf	第1巻	明治三十六年	64	3-01-34Meiji36.pdf	第3巻
翻刻要領		0-2honkoku.pdf	第1巻	明治三十七年	65	3-02-35Meiji37.pdf	第3巻
[年次・原本対応表]		0-3taihouhyou.pdf	第1巻	明治三十八年	66	3-03-36Meiji38.pdf	第3巻
跡見花蹊略歴		1-01-01Rireki.pdf	第1巻	明治三十九年	67	3-04-37Meiji39.pdf	第3巻
文久元年	22	1-02-02Bunkyu01.pdf	第1巻	明治四十年	68	3-05-38Meiji40.pdf	第3巻
文久二年	23	1-03-03Bunkyu02.pdf	第1巻	明治四十一年	69	3-06-39Meiji40.pdf	第3巻
文久三年	24	1-04-04Bunkyu03.pdf	第1巻	明治四十二年	70	3-07-40Meiji42.pdf	第3巻
文久四年 元治元年	25	1-05-05Bunkyu04&Genji01.pdf	第1巻	明治四十三年	71	3-08-41Meiji43.pdf	第3巻
元治二年 慶応元年	26	1-06-06Genji02&Keio01.pdf	第1巻	明治四十四年	72	3-09-42Meiji44.pdf	第3巻
慶応二年	27	1-07-07Keio02.pdf	第1巻	明治四十五年 大正元年	73	3-10-43Taisho01.pdf	第3巻
慶応三年	28	1-08-08Keio03.pdf	第1巻	大正二年	74	3-11-44Taisho02.pdf	第3巻
慶応四年 明治元年	29	1-09-09Keio04&Meiji01.pdf	第1巻	大正三年	75	4-01-45Taisho03.pdf	第4巻
明治二年	30	1-10-10Meiji02.pdf	第1巻	大正四年	76	4-02-46Taisho04.pdf	第4巻
明治三年	31	1-11-11Meiji03.pdf	第1巻	大正五年	77	4-03-47Taisho05.pdf	第4巻
明治四年	32	1-12-12Meiji04.pdf	第1巻	大正六年	78	4-04-48Taisho06.pdf	第4巻
明治五年	33	1-13-13Meiji05.pdf	第1巻	大正七年	79	4-05-49Taisho07.pdf	第4巻
明治六年	34	1-14-14Meiji06.pdf	第1巻	大正八年	80	4-06-50Taisho08.pdf	第4巻
明治七年	35	1-15-15Meiji07.pdf	第1巻	大正九年	81	4-07-51Taisho09.pdf	第4巻
明治八年	36	1-16-16Meiji08.pdf	第1巻	大正十年	82	4-08-52Taisho10.pdf	第4巻
明治九年～明治十七年	37-45	1-17-17Meiji09-17.pdf	第1巻	大正十一年	83	4-09-53Taisho11.pdf	第4巻
明治十八年	46	1-18-18Meiji18.pdf	第1巻	大正十二年	84	4-10-54Taisho12.pdf	第4巻
明治十九年	47	1-19-19Meiji19.pdf	第1巻	大正十三年	85	4-11-55Taisho13.pdf	第4巻
明治二十年	48	2-01-20Meiji20.pdf	第2巻	大正十四年	86	4-12-56Taisho14.pdf	第4巻
明治二十一年*	49	2-02-21Meiji21.pdf	第2巻	後記		kouki.pdf	別巻
明治二十二年**	50	2-03-22Meiji22.pdf	第2巻	口絵解説 1		kuchie-1.pdf	第1巻
明治二十三年	51	2-04-23Meiji23.pdf	第2巻	口絵解説 2		kuchie-2.pdf	第2巻
明治二十五年	53	2-05-24Meiji25.pdf	第2巻	口絵解説 3		kuchie-3.pdf	第3巻
明治二十六年	54	2-06-25Meiji26.pdf	第2巻	口絵解説 4		kuchie-4.pdf	第4巻
明治二十七年	55	2-07-26Meiji27.pdf	第2巻	扉裏解説 1		tobira-1.pdf	第1巻
明治二十九年	56	2-08-27Meiji29.pdf	第2巻	扉裏解説 2		tobira-2.pdf	第2巻
明治三十年	57	2-09-28Meiji30.pdf	第2巻	扉裏解説 3		tobira-3.pdf	第3巻
明治三十一年	58	2-10-29Meiji31.pdf	第2巻	扉裏解説 4		tobira-4.pdf	第4巻
明治三十二年	60	2-11-30Meiji32.pdf	第2巻				
明治三十三年	61	2-12-31Meiji33.pdf	第2巻	*別巻に手帳8号を所収、pdf無し			
明治三十四年	62	2-13-32Meiji34.pdf	第2巻	**別巻に手帳21号を所収、pdf無し			
明治三十五年	63	2-14-33Meiji35.pdf	第2巻	電子データ制作者（敬称略） 岩田秀行/櫻井彩/石坂淳子			

表5『PDF『跡見花蹊日記』概略

4. 跡見花蹊日記のデジタルアーカイブ化の基礎ステージとしてのフルテキスト・データベースの構築の試み

4.1 跡見花蹊日記フルテキスト・データベースの構築に係る基礎データのDB搭載前処理について

1-02-02Bunkyu01.pdf から始まる花蹊日記の全文 PDF は、本学ホームページに掲載されており、残念ながら掲載の日付など一部に詳細は不詳であるが、花蹊日記編集委員会座長の岩田秀行先生（現名誉教授）らが電子データの作成に与っていることが、註20に記載の URL のページから確認される。

日記1年分が1PDF ファイルとされているが故に、日付単位の記述を1レコードとしてフルテキ

スト・データベースに搭載するためには、初手の作業は、日付単位で記述データを抽出するように、日付ごとに切断分割するための目印を挿入することであった。結果、全19,384件のレコードが抽出されて、データベースに搭載された。

このフルテキスト・データベース化するための前処理、および「跡見花蹊日記におけるユニーク語彙の出現に係る検証の試み」に関与する検索事例の記録化については、本学3年生5名の助力を得た。また、データ搭載から検索システムの試行および予備的公開については、早稲田システム開発株式会社の支援を得た。

4.2 跡見花蹊日記フルテキスト・データベースの検索インターフェースとその結果の表示

図3-9は跡見花蹊日記フルテキスト・データベースにおいて人名「大隈」・事項「震災」・作品名(一部)「日月」について検索する、検索インターフェース・検索ヒットの一覧・検索結果詳細の画面を示している。

全レコード19,384から、人名「大隈」⇒27件・事項「震災」⇒20件・作品名(一部)「日月」⇒30件がヒットして、さらにその日記記述詳細が表示される。図5・7・9においては該当する日記PDFの部分を同図の右側に掲出した。



図3：跡見花蹊日記フルテキスト・データベース画面①
フリーワード「大隈」で検索

No.	ID	大分類	年代	日付	内容
1	7445	跡見花蹊日記	明治 2 6年	十二月六日	十二月六日 水曜 晴。皇。朝五時起。坐行。課業如例。来客。岡本機太郎及吾沢洗治郎。朽木氏より奥の子餅一箱。岡本吾沢再入より。カステラー一箱。中村。
2	7831	跡見花蹊日記	明治 2 7年	十一月二日	十一月二日 金曜 晴。朝五時起。修行。課業如例。午下。門田氏。岩倉氏二行。教授して四時。五時頃ヨリ。祭。石神井村へ行。市蔵尚道也。佐野隆盛より。
3	12966	跡見花蹊日記	明治 4 2年	一月二十七日	一月二十七日 丁亥 水曜 晴。課業如例。来客。西山すずま子。午下五時より。予。正子。季子と興しく有楽園に伊国震災感懐演劇を見る。九時帰。
4	18643	跡見花蹊日記	大正 1 2年	九月一日	九月一日 丁丑 土曜 晴。早起。念仏修行済。方々え手紙を出入。村井吉兵衛。渡辺鶴子。外五軒え。昼飯祝膳二着。十二時。此時俄然震災。いつもの如く。
5	18647	跡見花蹊日記	大正 1 2年	九月五日	九月五日 辛巳 水曜 晴。此夕。北条萬房所さまより来る。東京の様子少しも知らず。様子きかして。此方八無事。酒井も同じ。畑田和子震災のため死去。
6	18648	跡見花蹊日記	大正 1 2年	九月六日	九月六日 壬午 木曜 晴。朝より見舞帳々。畑田伯より便にて。奥方一日の大震災二草屋倒壊之勢。御逝去之由不取敢内報。朝より治郎を頼み。高橋弘。加茂。
7	18662	跡見花蹊日記	大正 1 2年	九月十九日	九月十九日 乙未 水曜 晴。朝の念仏修行する。屋根瓦を落してふき置(直)しする。また震災の如し。房州北条より通報氏。午下。房州より芳房さま。
8	18673	跡見花蹊日記	大正 1 2年		早起。震災見舞の札状出す。九州光明会。奈良井上隆彦。公磨毛利様。外六軒え。夜。念仏修行ス。
9	18683	跡見花蹊日記	大正 1 2年	十月六日	十月六日 壬子 土曜 雨。朝の修行済。来客つきにて地方えも書を出す。丹羽信子より文書す。某地の家ノ焼失。鎌倉にて震災の為に家たをれ。下敷と成て。
10	18685	跡見花蹊日記	大正 1 2年	十月八日	十月八日 甲寅 月曜 雨。朝の修行済。此日。駿ヶ台田村の野田様さま。此度の震災二付。田村の家も焼て。其時逃ふさま。老人八人に食みさきりて先はたかと。
11	18689	跡見花蹊日記	大正 1 2年	十月十二日	十月十二日 戊午 金曜 雨。朝の修行済。来客。石崎。松野。震災の如しにて御互に語り合。玉枝方え便りして大久保殿え何か見舞をと存れと。み。

図6：跡見花蹊日記フルテキスト・データベース画面④
フリーワード「震災」で検索ヒット一覧：該当20件

九月一日 丁丑 土曜 晴。

早起。念仏修行済。方々え手紙を出入。村井吉兵衛。渡辺鶴子。外五軒え。昼飯祝膳二着。十二時。此時俄然震災。いつもの如く落付たるに。わか体にな付繰ひ。治子。光をいた(抱)きて其内いく子。富兒をいたきて来る。みなに此時。如来に御助けを受けるので一同御念仏する。一寸震やみたる時。そら今庭に出てよとみな庭に出る。大赤樫の根元によりて避難する。やかと新田より寿子。政子。其外四娘連れ来る。内ハみな焼落たり。父と教とハ未だ逃げ来らず。心配。其内火災起る。内ハみな焼落たり。父と教とハ未だ逃げ来らず。心配。其内火災起る。すし兼より五人来る。其内新田敦子も来る。大安心。大震度々。学校表大門倒壊。其向家屋みな倒れ。吾人即死。死者を出したり。続々正報きたる。瓦斯ハ絶る。暗黒ながら火事に断水断電。月もよし。明らか(ママ)庭にて通夜する。南。東。北とより火盛也。夜。砲兵工シヤワダン菓。不残バク死にて其音すさまじし。

図7：跡見花蹊日記フルテキスト・データベース画面⑤
ヒット詳細：大正12年9月1日「十二時、此時俄然震災」 右に該当日記 PDF (部分)



図8：跡見花蹊日記フルテキスト・データベース画面⑥
フリーワード「日月」で検索ヒット一覧：該当33件



図9：跡見花蹊日記フルテキスト・データベース画面⑦
ヒット詳細：明治43年11月5日「久米民之助ハ日月之画二幅対、為持遣す」 右に該当日記 PDF (部分) ⇒参照 図17：「揮毫雑記」の記述

4.3 跡見花蹊日記におけるユニーク語彙の出現に係る検証の試み

4.3.1 跡見花蹊日記におけるユニーク語彙とは

試行的に構築した『跡見花蹊日記』のフルテキスト・データベースは冊子体日記をそのままに PDF 化されたデジタルデータを素材にしている。この度のデータベース化に際し、人名・事項および作品名からそのフルテキストを検索するに際し、一切の元データの改変加工は無い。また、翻刻して冊子印刷されたものに施された「校訂者注記」については初巻に掲載の「翻刻要領」にあるものがそのまま踏襲されている。

[校訂者注記について]²¹⁾

一、校訂者の注記は、すべて（ ）で括り、原本の文字と区別した。(中略)

一、明らかな脱字、また文字を補ったほうが意味が取りやすい場合、当該箇所、あるべき文字を補った。

この校訂者注記は人名・事項および作品名の検索に若干の精度と再現性の向上に資することはあるが、本データベースにおいては謂ゆる「名寄せ」をしての典拠コントロールを実装しているわけではない。人名においても姓名がともに記載されて日記に現れることは稀である。作品名においては現行通名として安定している固有名で日記に記載されることは、一層のこと極めて稀である。

以下に触れる「揮毫雑記」が花蹊にとっての作品の記録の控えであることもあって、作品名が日記に忠実に再現されることは、想定されたことではあるが、望み難く、現行通名からの検索においては、そのヒット率はかなり低率であることが確認された。

このようなフルテキストにおいてのデータの正規化と典拠的コントロールの未然においては、その有効性に翳を落とす恐れのあることは事実である。一方、表6のように花蹊日記における歴代総理大臣の名前(姓名のフル記載は稀であるが)の出現を見るにおいて、花蹊と明治・大正の政財界の貴顕あるいは皇室との交流の実相の把握において、同日記が日本近代史において新たな側面を照射する有効な実証素材であることは、十分に期待できるのではないだろうか。

4.3.2 人名・事項・作品名から花蹊日記を検索すると

以下、人名・事項・作品名を花蹊日記フルテキスト・データベースにおいて検索した結果の一部を表にまとめて掲出する。人名と事項は前述の2018年刊の泉雅博・植田恭代・大塚博著『跡見花蹊 女子教育の先駆者』の巻末に掲載されている「人名索引(p.1-6)」と「事項索引(p.7-11)」から明らかに花蹊没後に登場する索引語などを除いて、検索を重ねた。

表7: 「人名」を検索語とする上位の検索結果においては、ヒットランキングの上位には日記記述の抜粋を付して、全検索語(ヒット件数1以上)をまとめている。上の「人名索引」から花蹊生涯の範囲外の人名等を除いた有効語彙395において、ヒット件数が1以上であったものは157語、故に

代	総理大臣名	姓	姓名	名	在任の始まり	日記に現れる日付	日記での関連記述	検索キー
1	伊藤 博文	169	5*	46	1885 明治18.12.22	明治18.9.14	小松宮邸に伊藤博文宮内卿夫婦及いく子嬢等を召され、予も召され、余興、投壘、囲碁等、其外遊戯ありて盛也。	姓名による
2	黒田 清隆	69*	0	0	1888 明治21.4.30	明治22.	此夜、以号外、報来黒田総理大臣辞職、三条内府兼任総理大臣。	姓による
3	山縣 有朋	61	3*	3	1889 明治22.12.24	明治26.9.13	伯爵山縣有朋妻友子、昨十二日午前十時十五分死去、来ル十五日午後二時、護国寺ニ於テ仏葬式相當申候之計音来。	山縣有朋による
4	松方 正義	15	1*	1	1891 明治24.5.6	明治40.4.24	四月二十四日 癸卯 水曜 晴。未信、伯爵松方正義、同政子。	姓名による
5	伊藤 博文				1892 明治25.8.8			
6	松方 正義				1896 明治29.9.18			
7	伊藤 博文				1898 明治31.1.12			
8	大隈 重信	27*	0	0	1898 明治31.6.30	明治22.	朝、新聞以号外、報大隈外務大臣之負傷来。昨午後四時頃内閣ヨリ帰途、爆烈彈ヲ馬車中ニ投シ、大臣右足ノ内踝と同膝部下ノ内側トニ二ヶ所之傷ヲ負レリ。	姓による
9	山縣 有朋				1898 明治31.11.8			
10	伊藤 博文				1900 明治33.10.19			
11	桂 太郎	27	2*	285	1901 明治34.6.2	大正2.10.11	閑様松井氏を問て帰。本日、桂太郎公薨去のよし、国家のため、なげきてもなほあまりあり。	
12	西園寺 公望	5*	0	0	1906 明治39.1.7	大正8.8.24	西園寺侯、御機嫌よく講和の御大役愈々済せられ、殊に御健康にて、長々の御苦心も先々程よく満たせられて、歡喜限りなし。可哀々々。	姓による
13	桂 太郎				1908 明治41.7.14			
14	西園寺 公望				1911 明治44.8.30			
15	桂 太郎				1912 大正1.12.21			
16	山本 権兵衛	146	1*	3	1913 大正2.2.20	大正2.2.13	終日揮毫ものす。来客、梶山氏。後継内閣山本権平伯総理大臣と云。	*山本権平伯 (山本権兵衛)
17	大隈 重信				1914 大正3.4.16			
18	寺内 正毅	15*	0	0	1916 大正5.10.9	明治43.8.22	日韓合併条約ハ、既に寺内統監と李総理との間に調印終りたるを以て、廿二日、別項記載の如く、臨時枢密院會議の御詔諭を終りたるが、今其内容を洩れ聞くに、韓国皇室の待遇、日本の准皇族となし、朝鮮王と称し……、韓国称号廃止	姓による
19	原 敬	1029	1*	121	1918 大正7.9.29	明治18.	原敬夫人貞子、天津より帰朝して清国之形況を語る。	姓名による
20	高橋 是清	1831	0	0	1921 大正10.11.13			姓のみで特定困難
21	加藤 友三郎	84	2*	2	1922 大正11.6.12	大正12.8.28	竹内きたる。総理大臣加藤友三郎氏告別式。	姓名による
22	山本 権兵衛				1923 大正12.9.2			
23	清浦 奎吾	7	0	0	1924 大正13.1.7	大正11.10.30	うしろに総理大臣加藤氏をはしめ清浦氏外大臣方。君か代唱歌、摂政宮勅語御朗誦、御声の麗しき、大なる玉の如し。この御声に感泣せざるものなし。	姓による
24	加藤 高明	84	2*	5	1924 大正13.6.11	明治41.11.23	午下二時より三光坂園田氏二行。本日ハ加藤高明夫婦、近日英国大使ニ任せらるゝニ付、送別会、実ニ大勢、盛会也。	姓名による

表6：花蹊日記における歴代総理大臣名の出現

注：総理大臣名に続き、検索キーが姓／姓名／名のいずれかであるかを「*」で示す。複数回就任の総理については、初回の就任についてのみ日記記述を付す。

「人名索引」からのヒット率は39.4%であった。

表8：「[事項]を検索語とする上位の検索結果」においては、ヒットランキングの上位には日記記述の抜粋を付して、全検索語（ヒット件数1以上）をまとめている。上の「事項索引」から花蹊生涯の範囲外の事項等を除いた有効語彙301において、ヒット件数が1以上であったものは96語、故に「事項索引」からのヒット率は31.9%であり、人名、事項ともに3割を越えた。

この「人名索引」に採用されていないが、花蹊肖像を描いた黒田清輝をはじめ文化芸術に係って歴史上必定の人物についても花蹊日記においては多く確認される。

黒田清輝（6件のヒット、以下同様）・志賀重昂（37）・原三溪（8）など。

作品名については、上述の「3.2.1 花蹊記念資料館による既刊冊子体目録から」に掲載の『跡見学園女子大学花蹊記念館収蔵資料総合目録 1-3_2018-2020（平成30-令和2年度）』に掲載の169点について検索した結果から、ヒット件数1以上の50作品について、次の表9にまとめた。

表9において、『跡見学園女子大学花蹊記念館収蔵資料総合目録 1-3』に掲載の169作品の「作品名」を検索語として日記全文を検索し、文字列においてヒットと想定される50作品をまとめたが、東アジア文化圏における美術作品のタイトル付与に連なる「画題」の特性から、目録に定位された花蹊作品の作品タイトルをもって、日記全文を検索する時、作品タイトルと日記記述との間に明確にその合致を見出すことは、あらかじめ想定された通り、その困難さは極めて如実であった。

すなわち、本表における「合致の項目」を：

「-」＝作品と日記記述に合致を認めることが困難なもの

「△」＝作品と日記の記述に合致の可能性有りと予想されるもの

「○」＝作品と日記の記述とが合致すると判定されるもの

に分類したが、明らかな合致「○」と検証されるものは極めて稀であることが見て取れよう。

4.4 「揮毫雑記」という花蹊アーカイブと作品検索に係る現況から展望できること

いずれの分野の作家であれ、「作家（artist）は一面優れてアーキビスト（archivist）である」と言われる。自らの作品を日記に、片々のメモワールにあるいは独立した作品控えに克明に記録する作家の一人として、ワシリー・カンディンスキー（Wassily Kandinsky, 1866-1944）が著名である。日本近代美術史においては岸田劉生（1891-1929）の日記があり、東京国立近代美術館に劉生アーカイブとして所蔵されている自筆の作品目録稿がある（図10-11）。

ハンス・K・レーテルらの編集になるカタログレズネ『カンディンスキー 全油彩総目録2（1916-1944）』²²⁾においては、カンディンスキー財団（Fonds Kandinsky）が所蔵するハンドリストの固有番号が併記されている（図12）。

前述の通り、人名・事項の日記検索に比して、『花蹊記念館収蔵資料総合目録』に掲載され現行通名と言える作品名からの日記検索は、その再現性は高いとは言えない。上述の「画題」の特性に加え

事項名	ヒット件数	和暦年	月日	日記述抜粋	※初出の産産を示す
唯尊寺	134	文久元年	8月19日	早朝より元之助と二人連にて木津へ帰り、 唯尊寺 にて屏風説。此日、日和能、昼後、寺跡見さま御内女子斗、天王寺へ参詣致し、日暮に帰り	
光円寺	86	文久2年	閏8月23日	朝よりうつほ 光円寺 へ参り、大和僧此人御親連の親君、河内僧主寺の親、二人肖像頼れ、顔写しに父さまと参る。	
校友会	53	明治33年	3月18日	日曜 彼岸ノ入。雨。来春、広田たけ。午下一時より、此度 校友会 ニ付賛助員を招き、万端協議す。	
波泉	48	明治23年	(4月)13日	波泉 発会式、執事於芝紅葉館。会者百六十八人余也。長明五番、紅葉館踊教番、余興也。五時全畢。	
上野精養軒	45	明治29年	6月25日	足にリヤウマチ発して、散歩し難く。課業如例。十一時後より、余、姉伯、重威、要治郎、千久子、桃子と同じく、 上野精養軒 ニ昼餐ヲ喫ス。	
女学校	29	明治6年	(1月)13日	朝七字より良姫さま 女学校 へ御入門也。重敬、花嫁御共いたし候。御晴願三字也。	
法華経	24	明治38年	8月2日	片岡歌子、稻吉子、五十知時子、浜野よし子、鶴川菊子、岩上愛子、金子作子、能勢基重、土方久元。本日より 法華経 揮毫をはしむ。	
陸軍	24	明治25年	1月9日	此日如例年、 陸軍 士官等打鞠競争ヲ拜観ス。北白川宮、伏見宮、閑院宮、清州、有馬秋宮、及伊達夫人全子、閑院宮智恵子君ニモ謁ス。	
長源寺	17	文久2年	7月25日	此屋後時、勝間 長源寺 主寺参られ候。画の認物の相談有、早速帰られ候。日暮、父さま、元之助、帰られ候。此日屋時より大水出	
学習院	16	明治19年	2月16日	午下、神田 学習院 火あり。五時より七時に至る。全棟悉焼失ス。	
女教院	16	明治6年	(5月)22日	よし姫さまは女教の真木ト御成下され候て、 女教院 盛大に相行ひ度一念二付、右様のわけならば、こなたはいかほどの下官たりとも	
権典侍	13	明治6年	(11月)14日	小椋 権典侍 橋本夏子、皇女御降誕即刻御逝去、依而三日鳴物停止之事。いかにしてか、かゝる御事と歎息之至不可止事也。	
松花会	13	大正10年	6月25日	練修会あり。みなよく出来たり。会教三十番余あり。十二時全畢。此時より雨晴たり。昼早々より 松花会 始会相談会、三十人計奇集て種々。	
勝間	13	文久2年	7月25日	此日ハ朝より腹症にて、暇た(り)起たりして、終日暮らす。此屋後時、勝間 長源寺 主寺参られ候。画の認物の相談有、早速帰られ候。	
活入画	12	明治20年	(3月)12日	三条公より御招二預り、相公及御簾中と共に、工科大学校にて洋人等の裡にて 活入画 を見る。山水之位置、人物之配合等ほとんど画の如し。	
四季花卉図	11	慶応4年/明治元年	閏4月3日	朝、鼎宅、絹地 四季花卉画 。夜、宮原へ行、講説聞、帰り、読書。夜半頃大雨、真におそろしき事也。	
大教院	10	明治6年	(5月)13日	朝露十字、教部省へ出頭。権権訓導拜命。三鳥教部大丞奉。夫ヨリ 芝大教院 へ出頭ス。三ヶ糸糸命給給係也。山本住吉、権亦軍少講義拜命。	

※全検索語 (ヒット件数以上: 96語)

唯尊寺(134)/光円寺(86)/校友会(53)/波泉(48)/上野精養軒(45)/女学校(29)/法華経(24)/陸軍(24)/学習院(16)/女教院(16)/権典侍(13)/松花会(13)/勝間(13)/活入画(12)/四季花卉画(11)/大教院(10)/堀川(10)/跡見女学校(9)/高等女学校(9)/高津(9)/厚德会(8)/古稀(8)/財団法人(8)/白子(8)/役人(7)/東洞院(7)/教部省(6)/視察(6)/不言亭(不言庵)(6)/堂島(6)/四季の声(5)/女子師範学校(5)/摂津国西成郡木津村(5)/富士山(5)/日露(5)/出雲(5)/帝國教育会(4)/日清(4)/会津藩(3)/獨見女学校(3)/華族女学校(3)/神主(3)/校地(3)/史記(3)/五位(3)/年寄(3)/不言庵(3)/土佐(3)/学制(3)/浅香(3)/安治川(2)/伊勢神宮(2)/桂川(2)/小石川柳町(2)/石高(2)/時習館(2)/地鎮祭(2)/女子大(2)/私立跡見女学校規則(2)/町人(2)/日清戦争(2)/ハイカラ(2)/『花の下みち』(2)/琵琶湖(2)/淀川(2)/長野村(2)/阿弥陀如来(1)/アメリカ(1)/徳多(1)/大奥(1)/学制頒布(1)/春日社(1)/勲六等宝冠章(1)/工科大学校(1)/皇典講究所(1)/五挺家(1)/御前揮毫(1)/朔平門(1)/シカゴ(1)/住屋(1)/女子学習院(1)/清国公使館(1)/清和門(1)/道頓堀(1)/内覧(1)/難波村(1)/幕府(1)/百姓(1)/ラウストリヤ博覧会(1)/はいから(1)/天誅(1)/記念祝賀(1)/大震災(1)/あめりか(1)

表8: 「事項」を検索語とする上位の検索結果

ヒットランキング上位には日記記述抜粋を付す。全検索語 (ヒット件数1以上) をまとめる。

目録番号	作品名	検索語	ヒット件数	制作年	合致	日記記述の日付		日記記述抜粋
94	山水園	山水	109	n.d.	-	慶応4年/明治元年	7月17日	早朝より平辰秋七草認、又辰巳屋山水認懸る。
38	牡丹園	牡丹	8	明治19年	-	文久3年	11月22日	此日、牡丹にかゝる。
121	牡丹園			n.d.	-	文久3年	11月22日	此日、牡丹にかゝる。
1	萬山墨翠園	萬山墨翠	5	明治3年	○	明治3年	3月9日	萬山墨翠にかゝる。
21	竹園下絵	竹	5	n.d.	-	文久4年/元治元年	10月26日	此日、全紙竹認ル。
50	竹之園			大正8年	○	大正8年	4月7日	朝より色紙、竹、又松の画揮毫ス。
132	竹園			明治39年	-	文久4年/元治元年	10月26日	此日、全紙竹認ル。
26	紙籠之園	紙籠	4	n.d.	-	明治3年	2月8日	紙籠さま認ル。
39	四季花卉園	四季花卉	4	明治10年	-	明治5年	(2月) 17日	終日揮毫。額面四季花卉也。公、番代ニテ留朝。
15	墨竹園	墨竹	3	n.d.	-	文久4年/元治元年	9月25日	梅認上で、二枚折墨竹認にかゝる。
27	虎園	虎	3	n.d.	-	文久元年	10月19日	帰り、又一寸辻さま参り、網地猛虎認、終日致し
133	梅園	梅	3	大正7年	-	慶応4年/明治元年	9月25日	帰り、蓮さまより御頼みの横二枚認ル。松竹梅園也。夜、詩作。
5	墨梅園	墨梅	2	明治12	-	明治19年	(12月) 12日	応石山氏囀、揮毫水墨梅花十莖。
7	松間旭日園	松旭日	2	明治43	-	明治41年	8月29日	朝より、旭川額面松旭日之園落製す。
19	群亀園下絵	群亀	2	n.d.	-	文久3年	6月18日	此日、横物群亀認ル。
23	竹園	竹園	2	n.d.	-	明治44年	2月1日	中曾根氏、墨竹園還す。
28	松鶴不老之園	老松鶴	2	明治25年	-	文久2年	8月19日	此日朝より三間四枚横表老松鶴認にかゝる。
35	鯉園	鯉	2	n.d.	-	文久4年/元治元年	10月5日	夫より全紙鯉認ル。
47	梅と寒菊園	寒菊	2	明治21年	-	文久3年	12月17日	廿一枚目寒菊にかゝる。
88	立雛園	立雛	2	n.d.	-	文久4年/元治元年	2月18日	此日朝、後藤え行、帰り、立雛認にかゝる。
110	四季山水園「夏木蒼涼」	四季山水	2	明治9年	-	明治4年	7月4日	終日、四季山水揮毫。
116	老松園	老松	2	n.d.	-	大正2年	5月6日	尺八堅物、老松揮毫する。
117	菖蒲之園	菖蒲	2	明治40	-	明治26年	5月4日	此朝、久米氏舞扇、櫻、菖蒲揮毫。
118	扇面貼交	貼交	2	n.d.	-	文久2年	9月16日	朝、後藤え参り、稽古して帰り、昼後より張交物認ル。
6	藤に雉園	藤・雉	1	n.d.	-	大正3年	7月28日	老松之園、梅花之園、懸樋一月もの、養老之詩、雉子、藤花
17	幽谷園	幽谷	1	n.d.	-	明治18年	(11月) 19日	乗興、余与諸氏、及筆詮、幽谷、席上作書画。
32	養老渾之園	養老	1	n.d.	-	大正3年	12月29日	朝より尺八絹本に養老之園二枚揮毫して、京都なる
36	光明皇后御歌	光明皇后 御歌	1	大正13年	△	大正14年	3月16日	中島先生大画箋(賤) 墨竹と秋草小画。光明皇后御歌驚箋全紙三枚持帰られる。
48	梅花園	梅	1	明治3年か?	△	明治3年	12月14日	横梅花園揮毫。
49	若竹之園	若竹	1	大正5年	-	文久3年	12月15日	十八枚、又十九枚、萩、若竹、認上ル。
52	芙蓉水禽園	不要	1	明治時代か	○	明治32年	8月28日	諏訪氏、絹本整物芙蓉瑞鳥鳥之園。
59	蓬萊山園 (二首之一)	蓬萊山	1	n.d.	-	大正5年	10月17日	蓬萊山落成。
65	紅葉飛雁園	紅葉	1	n.d.	-	文久元年	9月8日	朝より認物、紅葉額面、懸樋一認上、早速辻さま持て参り、
69	ふんし園	ふんし	1	大正4年	-	慶応3年	4月5日	私留主中、式部女来り、芝山殿ふんしの画半切頼来り候よし也。
72	花鳥園	花鳥	1	n.d.	-	文久2年	11月20日	朝、辻さまより帰り、箱地花鳥認にかゝる。
80	桜花園	桜花	1	n.d.	-	大正6年	6月26日	桜花彩色画渡ス。
85	下絵 松間旭日園	松旭日之園	1	n.d.	-	明治41年	8月29日	朝より、旭川額面松旭日之園落製す。
91	老松	老松	1	大正5年	-	大正2年	5月6日	尺八堅物、老松揮毫する。
99	松に鶴之園	松に鶴	1	大正4年	-	明治3年	10月26日	松に鶴の画渡す。
111	四季山水園「幽篁晚月」	幽篁晚月	1	n.d.	-	明治4年	3月12日	レン幽篁晚月、井上氏より。
123	芙蓉園	芙蓉	1	n.d.	-	明治4年	1月21日	又木芙蓉、菊揮毫。
127	養老之園 (画)	養老之園	1	大正3年	○	大正3年	12月29日	朝より尺八絹本に養老之園二枚揮毫して、京都なる相川氏え
128	養老之園 (詩)	養老之詩	1	大正3年	○	大正3年	12月18日	相川氏え老松之園、梅花之園、懸樋一月もの、養老之詩、雉子
138	無我	無我	1	大正7年	○	大正7年	10月24日	無我の二字、掛物にして、中島君え病気気舞に贈る。
146	梅松園下絵	梅松	1	n.d.	-	明治3年	閏10月8日	此日、半切梅松二枚一揮スル。
151	光明皇后御歌	光明皇后 御歌	1	大正12	○	大正12年	3月16日	御依頼になる絹本に、光明皇后の御歌、万葉かなにて揮毫する
152	波間旭日園	旭日	1	n.d.	-	大正2年	1月6日	金箔紫金色にて実皆画に入たり。旭日を写生す。
158	秋草園屏風	秋草	1	n.d.	-	文久2年	7月17日	昼後より靱木津え参り、応挙屏風一組秋草花写しに参り候。
160	歡喜信楽	歡喜信楽	1	大正9年	△	大正12年	1月25日	筆物一枚せかまれて、ゆるく一枚額面、歡喜信楽の題字を遣す。
161	松園	松	1	大正9年	△	大正8年	4月7日	朝より色紙、竹、又松の画揮毫ス。

表9：『跡見学園女子大学花咲記念館収蔵資料総合目録1-3』に掲載の169作品からヒット件数1以上の50作品合致の項目：「-」作品と日記記述に合致を認めることが困難／「△」作品と日記の記述に合致の可能性有り／「○」作品と日記の記述とが合致

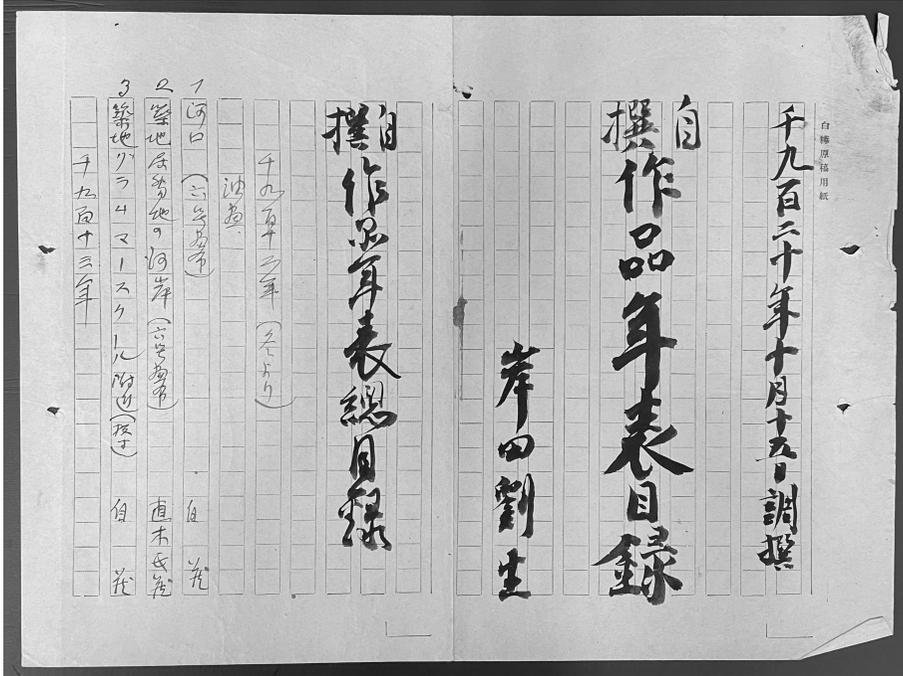


図10：岸田劉生「千九百二十年十月十五日調撰 自撰作品年表目録」の第一葉
 [劉生自筆による作品控え] no. 318, p. 47, 白樺原稿用紙9枚・毛筆/ペン字 大正元年より9年『岸田劉生 作品と資料』1995 に目録掲載 東京国立近代美術館アートライブラリ蔵



図11：岸田劉生「千九百二十年十月十五日調撰 自撰作品年表目録」の第二葉



668
赤い楕円
Rotes Oval
Ovale rouge
Red Oval
1920年
油彩, カンヴァス
71.5×71.2 cm
左下にモノグラムによる署名と年記
ハンドリスト II, no. 227

来歴
ビーレフェルト, エルンスト・ハイアー
デュッセルドルフ, ヘラ・ネーベルング
ミュンヘン, オットー・シュタングル画廊

所在
ニューヨーク, ソロモン・R. グッゲンハイム美術館

文献
グロマン, p. 333; 図 120, p. 359
ルーデンスタイン, cat. no. 98
バーネット, cat. no. 65

展覧会
A
1922, ベルリン(1)
1922, ミュンヘン, no. 2
1922, ストックホルム, no. 2
1923, ハノーファー

B
1976-77, ミュンヘン, no. 54, 図版あり
(その他のグッゲンハイム美術館関係の展覧会については、バーネットの文献を参照のこと)
(カラー図版, p. 599)

図12: カンディンスキーのカタログレズネにおけるハンドリストの記載例

No. 668に《赤い楕円》ハンス・K・レーテル編『カンディンスキー 全油彩絵目録2 (1916-1944)』に所収, p. 594.

て、これは作品名の確定が必ずしも制作時、作家自身によるものでは無く、謂ゆる芸術作品の社会的受容の経過の中において、それは展覧会歴・来歴等のプロヴァンス (provenance) の移動、あるいは文献の重なる出現といった作品の「受容史」という緩慢な過程を経て現行通名として確定されていくからである。故に現存作品とその制作時における状況を記録する作家自筆のアーカイブとを照合することは、カンディンスキー研究における財団所蔵のハンドリストの存在意味の重要性からも容易に検証されるように、この作家自身による作品の手控えは日記同等に、あるいはそれ以上の一等資料としての価値がある。

花蹊記念資料館においては、表10の通り、10冊の「揮毫雑記」が所蔵されている (図13-19)。『跡見花蹊 女子教育の先駆者』(2018) においてもその図版2点が掲載されるとともに、「そこ〔揮毫雑記〕には直筆手本を与えた人々の名が大勢記されている」と書かれて²³⁾、この資料が花蹊作品の来歴

項番*	花蹊記念館: 見出番号 (=資料番号)	書名	揮毫開始日付	～	揮毫終了日付	サイズ (cm)	備考 日付に関わる記述等**
1	600	揮毫雑記	明治10 (1877) 年12月1日	～	明治12 (1879) 年12月27日	11.2×15.2	・表表紙に、「明治十年丁丑十二月發行 ○揮毫雑記」の記述あり。
2	601	揮毫雑記	明治19 (1886) 年10月2日	～	明治21 (1888) 年9月15日	12.0×15.7	・表紙に、「明治十九年丙戌秋十月 揮毫雑記」の記述あり。
3	602	揮毫雑記	明治21 (1888) 年9月18日	～	明治22 (1889) 年8月	10.7×15.0	・表紙に、「明治戊子九月より 揮毫雑記」の記述あり。
4	603	揮毫雑記	明治22 (1889) 年8月28日	～	明治23 (1890) 年5月13日	10.3×14.9	・表紙左肩「揮毫雑記」、右肩に「明治廿二年 九月二日始」の記述あり。
5	595	揮毫雑記	明治33 (1900) 年2月25日	～	明治39 (1906) 年8月	10.0×14.3	・最初の頁に、「明治三十三年二月吉日」の記述あり。
6	625	揮毫雑記	明治24 (1891) 年1月	～	明治30 (1897) 年10月3日	16.3×23.7	・最初の頁に、「明治廿四年 辛卯第一月」の記述あり。
7	599	揮毫雑記	明治39 (1906) 年8月	～	明治43 (1910) 年3月15日	18.8×12.9	・最初の頁に、「明治三十九年八月」の記述あり。
8	596	揮毫雑記	明治43 (1910) 年5月15日	～	大正2 (1913) 年5月15日	23.1×16.0	・表紙に、「明治四十三年五月十七日 不言 揮毫雑記」の記述あり。
9	598	揮毫雑記	大正2年 (1913) 年5月18日	～	大正5 (1916) 年8月19日	23.2×15.4	・表紙に、「大正二年癸丑五月十三日 不言 揮毫雑記」の記述あり。
10	597	揮毫雑記	大正12 (1923) 年5月2日	～	大正14 (1925) 年7月26日	23.5×16.0	・表紙に、「大正十二年五月 安祥堂主人 揮毫雑記」の記述あり。

*項番は必ずしも年代順ではない

**表紙に書かれた日付とは異なることがある

表10: 「揮毫雑記」概要 参照: 図13-19

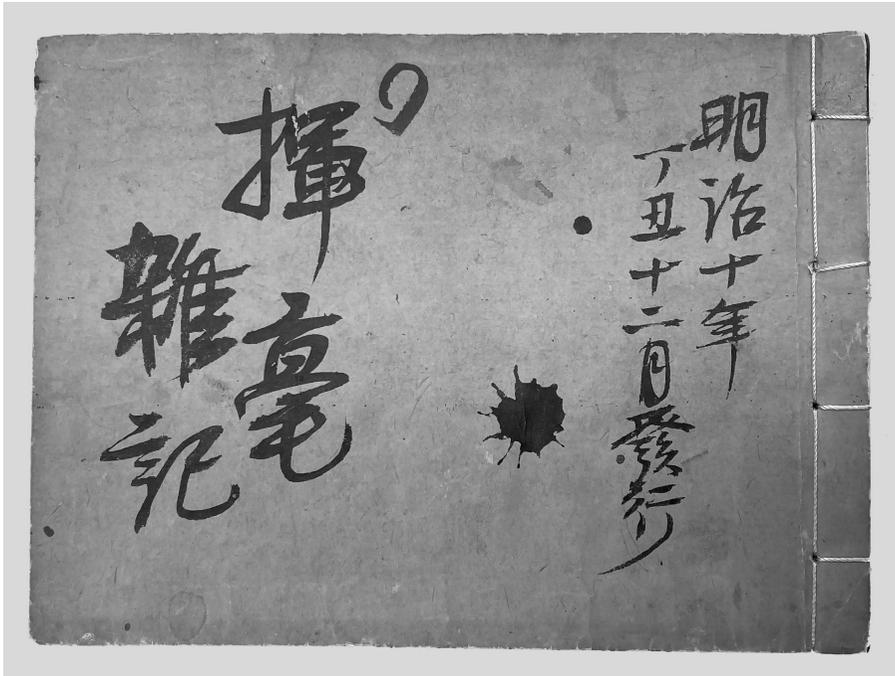


図13：「揮毫雑記」第1冊の表紙

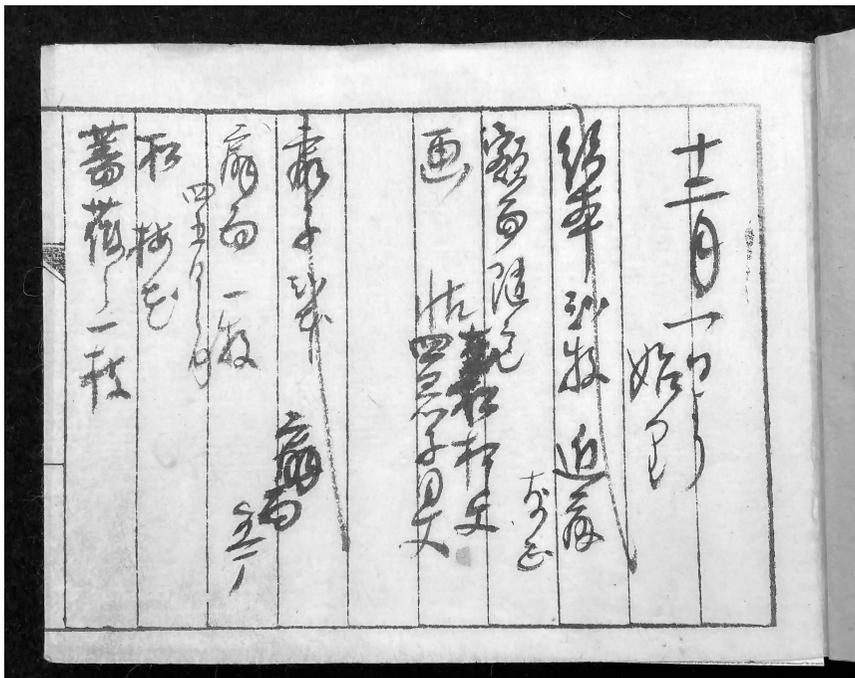


図14：「揮毫雑記」第1冊の第1頁

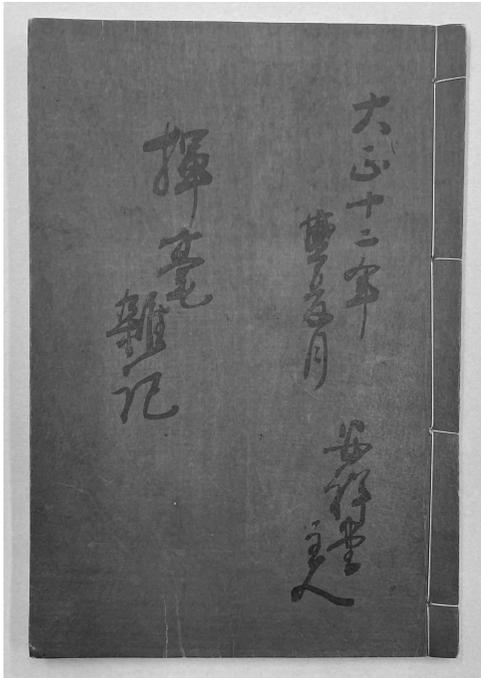


図15：「揮毫雑記」第10冊の表紙

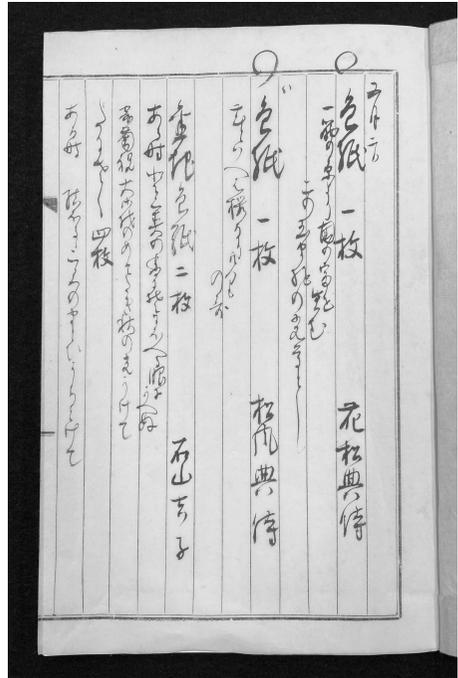


図16：「揮毫雑記」第10冊の第1頁

を語る稀有なアーカイブであることが指摘されている。

2点の現行通名作品が現れる「揮毫雑記」および箱書きとの関係を証する事例を図17-19に紹介する。

このような花蹊作品の制作と来歴に係って貴重な「揮毫雑記」は、その翻刻において相当の困難の高さはあるものの、史料価値が花蹊日記に次いであることは、容易に共有されることだろう。特に「直筆手本を与えた人々の名が」記録されていることは、花蹊の作家として、教育者としての実像と影響においても考察が及ぶだろう点においても貴重である。

図18-19の《松間旭日図》《松鶴不老之図》と「揮毫雑記」および箱書きの関係、および読み下しについては、花蹊記念資料館の中出ひとみ氏、加賀谷信子氏のご教示を得ました。記してここに謝意を表します。

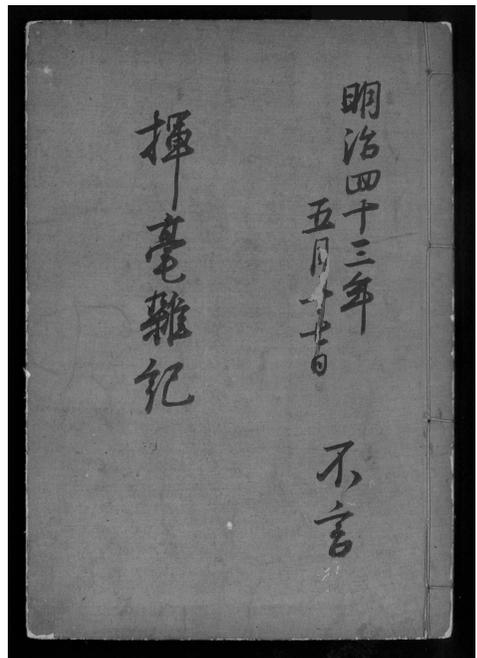


図17：「揮毫雑記」第8冊表紙

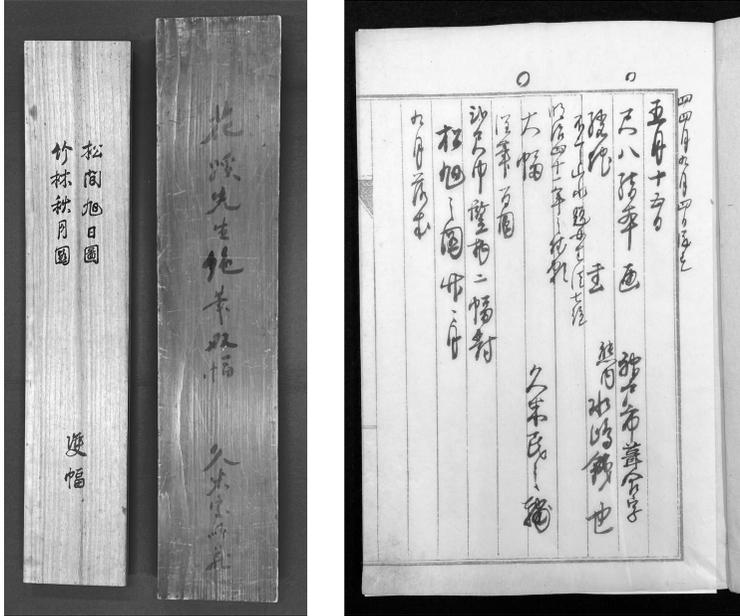


図18：《松間旭日図》に係わる「揮毫雑記」と箱書き

『花蹊記念館収蔵資料総合目録 1』の作品番号7《松間旭日図》に係わる「揮毫雑記」第8冊の巻頭頁（1丁表）における記述「大幅 久米民之輔/注筆百圓/式尺巾堅物二幅対/松旭之図 竹二月/九月落成」⇒参照 図9：花蹊日記 明治43年11月5日「久米民之助へ日月之画二幅対、為持遣す」

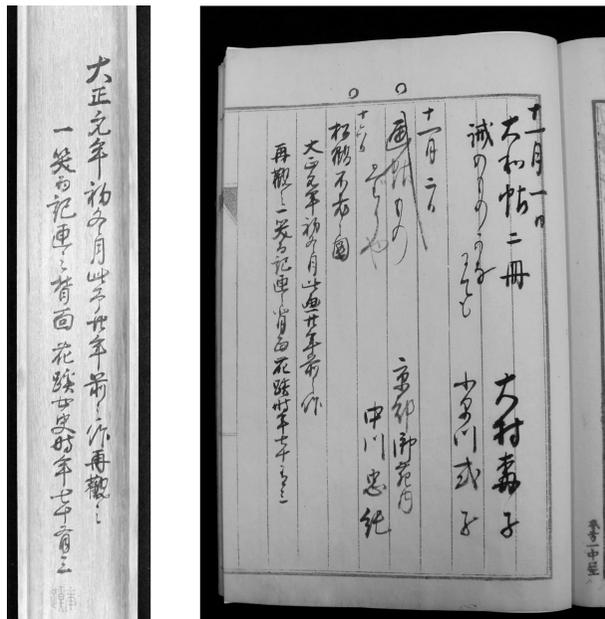


図19：《松鶴不老之図》に係る「揮毫雑記」と箱書き（蓋裏）

『花蹊記念館収蔵資料総合目録 1』の作品番号28《松鶴不老之図》に係る「揮毫雑記」第8冊41丁表における記述「十六日/松鶴不老之圖/大正元年初冬月此画廿年前之作/再觀之一笑而記画之背面 花蹊〔女史（箱書きに）〕時年七十有三 大正元年11月16日

5. 今後への展望と課題

前述の「3.2 把握された本学 MLA である花蹊記念資料館 (M) および大学図書館 (L) の MLA 連携候補の資料について」に表化して掲げた通り、すでに冊子体を含んで花蹊の MLA に係る諸素材のメタデータはかなりのボリュームをもって既存であることが確認される。把握されるこのような既存メタデータの記述実績があることを踏まえれば、直近で花蹊 MLA 連携の実現・実装化への道程もさほど遠くはない。

- i) M および A としてある既述のメタデータの検索可能化のためのデータベースの構築
- ii) 図書館 (L) の OPAC と i) との連携
- iii) 今回試行的に実装を構築した花蹊日記フルテキスト・データベースとの三者総合の MLA 連携を実装するシステムの構築

この3ステップを踏むことによって、「MLA 連携〔論〕を素地とする建学者アーカイブの構築」が可能であることを予見できる。

この構築は既述の通り、「管理公開等実務実態に即した業務モデル」に直系するものではない。あくまでも研究試行的なものであるが、来るべき大学(学園)アーカイブの形成に至る不可避のプロセスであろうことを今後の展望と課題の末尾において指摘しておきたい。

謝辞

本稿は「跡見花蹊アーカイブにおける MLA 連携を内包するシステム構築のための予備的研究 (i) —MLA 連携から見る花蹊日記における花蹊ユニーク語彙の出現にかかわる実事例検証の試み」を研究題目とする令和3年度大学特別研究助成費の交付を受けての成果の一端である。

本学跡見花蹊記念資料館においては、掲載図版に留まらず、「揮毫雑記」の詳細に係る情報のご提供をはじめ多大なるご支援、ご協力をいただいた。岸田劉生アーカイブからの写真提供は東京国立近代美術館アートライブラリによりご快諾頂いた。ここに記して深甚なる謝意を表したい。

また、花蹊日記の PDF の加工から事例検索に至る多大の作業については、本学3年生の三宅凜子さん、袴田久実子さん、萩原佑実さん、長橋望菜さん、八木岡英子さんの5名の協力を得た。あらためて記してお礼申し上げたい。

註および参考文献

1. <https://jpsearch.go.jp/>
2. https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki/2/digitalarchive_kyougikai/index.html
3. MLA 連携について定義的に解説する以下、p.79-81の記述は、2022年以降に丸善から刊行予定の『図書館情報学事典』に寄稿する拙文を記載フォーマットにおいて適宜修正して、ここに用いた。

4. 水谷編著『MLA連携の現状・課題・将来』勉誠出版, 2010.
5. 水谷「書評：日本図書館情報学会研究委員会編、『図書館・博物館・文書館の連携』他2件」(シリーズ・図書館情報学のフロンティア No.10), 勉誠出版, 2010.10, p.x, 186./石川徹也, 根本彰, 吉見俊哉編, 『つながる図書館・博物館・文書館 デジタル化時代の知の基盤づくりへ』, 東京大学出版会, 2011.5, p.xiv, 272, 8./NPO 知的資源イニシアティブ編著, 『デジタル文化資源の活用 地域の記憶とアーカイブ』, 勉誠出版, 2011.7, p.vi, 233.』『日本図書館情報学会誌』57(4)巻4号, 163-165, 2011.
6. 「研究文献レビュー MLA連携—アート・ドキュメンテーションからのアプローチ」『カレントアウェアネス』308号, p.20-26, 2011.
7. Nancy S. Allen. “The Art and Architecture Program of the Research Libraries Group”, *Art Libraries Journal*, vol. 13, no. 4, p. 5-10, 1988.
8. 水谷「美術資料をめぐるく外なる/内なる>ネットワークを考える」『現代の図書館』34巻3号, p.151-154, 1996.
9. 大学図書館研究編集委員会「小特集：MLA連携」『大学図書館研究』112巻, 2039-1/2044-11, 2019.
10. 水谷「極私的MLA連携論変遷史試稿」『美術フォーラム21』35号, p.127-134, 2017.
11. 水谷「MLA連携のフィロソフィー—連続と侵犯」という」『情報の科学と技術』61巻6号, p.216-221, 2011.
12. 吉川弘文館, 2019, 401, 401, 8p. なお、「シリーズ 歴史家とアーキビストの対話 第9回—提言」『歴史学研究』1013号, 2021.9において、加藤は「2000~2010年代における国立大学アーカイブズの動向」p.34-42. を寄せており、併せて参考とした。
13. 大阪大学出版会, 2013, 296p.
14. 全国大学史資料協議会編, 京都大学学術出版会, 2005, xi, 424p.
15. 菅2013, p.48.
16. ミネルヴァ書房, 2018, 259, 11p.
17. 菅2013, p.114-119.
18. https://andla.jp/da/?page_id=399
19. <https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/1171055100>
20. <http://www.atomi.ac.jp/univ/kakei/>
21. 『花蹊日記』第1巻, p.10-11.
22. ハンス・K・レーテルほか編『カンディンスキー 全油彩総目録2 (1916-1944)』岩波書店, p.594.原著[2 vols.]は、Sotheby Publications, 1982-1984.
23. 前掲書：註16, p.126.

図13-19に係る資料はいずれも「所蔵：跡見学園女子大学花蹊記念資料館」であり、第三者の許可なき複製を禁止する。

本稿は、跡見学園女子大学2021年度特別研究助成費に基づく研究成果の一部である。